北埋調報 8

美沢川流域の遺跡群Ⅵ

―― 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

昭 和 57 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

北埋調報8

美沢川流域の遺跡群Ⅵ

―― 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

昭和57年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

目　次

Ⅰ．調査の概要 …… 3
1．調査要項 …… 3
2．調査体制 …… 3
3．調査の経緯 …… 3
4．調査結果の概要 …… 4

Ⅱ．第Ⅰ黒色土層（Ⅰ黒層）の遺構と遺物 …… 9
1．遺構 …… 9
2．遺物 …… 11

Ⅲ．第Ⅱ黒色土層の遺構と遺物 …… 15
1．遺構 …… 15
2．遺物 …… 22

写真図版

Ⅰ．調査の概要

この調査は，現在使用されている千歳飛行場の南東側に隣接して計画されている，新千歳空港建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の事前調査である。調査は，昭和51年度から継続して行われており，今年度は第７年次にあたる。

１．調査要項

事　業　名	新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	北海道開発局札幌開発建設部
遺　跡　名	美々８遺跡（道教委登載番号Ａ－03－94）
遺跡の所在地	北海道千歳市字美々1292番地ほか
調 査 面 積	3,875 m²
調 査 期 間	昭和57年７月１日～昭和57年12月27日

２．調査体制

(財)北海道埋蔵文化財センター	理　事　長	浅井理一郎
	業 務 部 長	皆川　富三
	調 査 部 長	藤本　英夫
	調査第一班長	森田　知忠（発掘担当者）
	文化財保護主事	矢吹　俊男
	（調査補助員）	立川トマス

３．調査の経緯

本年度の調査地区は，新千歳空港建設用地の東縁にあり，用地を横断する市道をはさんで，前年度の調査地区の南側に位置している。比較的小面積でもあり，工事工程等の関係から，事前の詳細分布調査は省略された。調査日程は，つぎのとおりである。

１）現地調査および第１次整理：７月１日～８月31日

２）第２次整理および報告書作成：11月１日～12月27日

工事計画の変更によって，用地の東縁部の幅約60ｍの地域が，新たに用地に繰入れられることになり，これの分布調査が７月中旬に，北海道教育庁文化課によって実施された。

本年度の調査面積は，当初2,200ｍ²であったが，遺構・遺物分布の稀薄な部分があることが判明したために，調査方法を一部変更し，新たに追加された包蔵地の一部をもあわせて3,875ｍ²の調査を行った。

本書の執筆は，遺構の項を立川が，他を森田が分担した。

4．調査結果の概要

遺跡の標準的な土層は，図4に示したとおりで，このうちの第Ⅰ黒色土層（Ⅰ黒層）と第Ⅱ黒色土層（Ⅱ黒層）が遺物包含層である。調査地区のなかには，削平されて，Ⅰ黒層が既に失われている箇所があったので，延調査面積は，Ⅰ黒層3,385 m^2，Ⅱ黒層 3,875 m^2 の計 7,260 m^2 である（図6・10）

(1)　Ⅰ黒層の調査結果

Ⅰ黒層からは，道の跡と認められるもののほかには，遺構は検出されなかった。道跡は樽前山の軽石層（Ta－b層）に覆われていたことから，西歴1667年以前のものである。「ユウフツ越」ルートの原型をなす交通路の痕跡ではないかと思われる（図5，写真Ⅱ）。

Ⅰ黒層の遺物は，縄文時代最末期または続縄文時代初頭の土器と若干の石器，擦文時代の土器，須恵器および礫である。縄文土器は細片で，谷頭斜面の径数メートルの範囲から集中して出土した。

擦文時代の土器の分布にも偏りがある。発掘地区の北西隅に分布密度の濃いところがあり，これから距離を経るにしたがって次第に減少する。分布濃密地区は，昭和56年度の調査で多量の遺物が得られた箇所に最も接近したところで，美々8遺跡の主体部の一部と考えられる。土器は，桜井第Ⅰ型式相当の土師器および横走沈線文の施された初期の擦文土器がほとんどを占め（図7・8），いわゆる刻文土器はごく少量の破片が得られたにすぎない。

(2)　Ⅱ黒層の調査結果

遺構・遺物とも分布は稀薄であった。7個のTピットが遺構のすべてで，全例，溝形で底面に杭穴をもたないタイプである（図11～14）。

Ⅰ黒層						Ⅱ黒層					
遺構名	数	摘要	遺物名	数	摘要	遺構名	数	摘要	遺物名	数	摘要
道跡	1	東西方向，約12m	縄文土器片	566	晩期末または続縄文初	Tピット	7	溝形	縄文土器片(早期)	200	中茶路式,東釧路Ⅳ式
			土師系土器片	3,257	横走沈線を含む				〃 (前期)	4	縄文土器ほか
			刻文土器片	24	有文破片のみ				〃 (後期)	8	
			須恵器片	15					〃 (晩期)	146	
			石鏃	1	三角鏃				石鏃	28	柳葉形3，三角13，有茎12
			ナイフ・スクレイパー	2					ドリル	3	
			砥石	1	軽石製				ナイフ・スクレイパー	4	
			フレイク	13					石斧	13	うち10は細片
			礫	80					石皿	1	
									砥石	1	削平部から表採
									石錘	1	
									フレイク	91	
									礫	4	
計	1		計	3,959		計	7		計	505	

表1　遺構遺物一覧

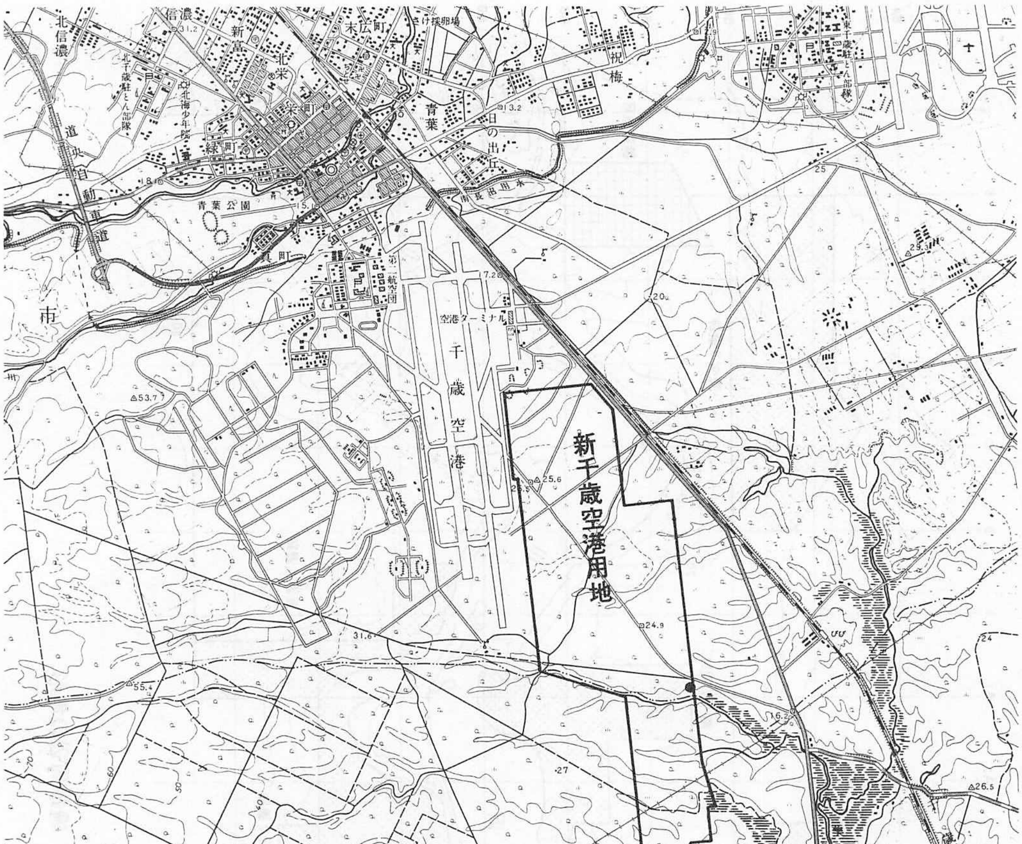
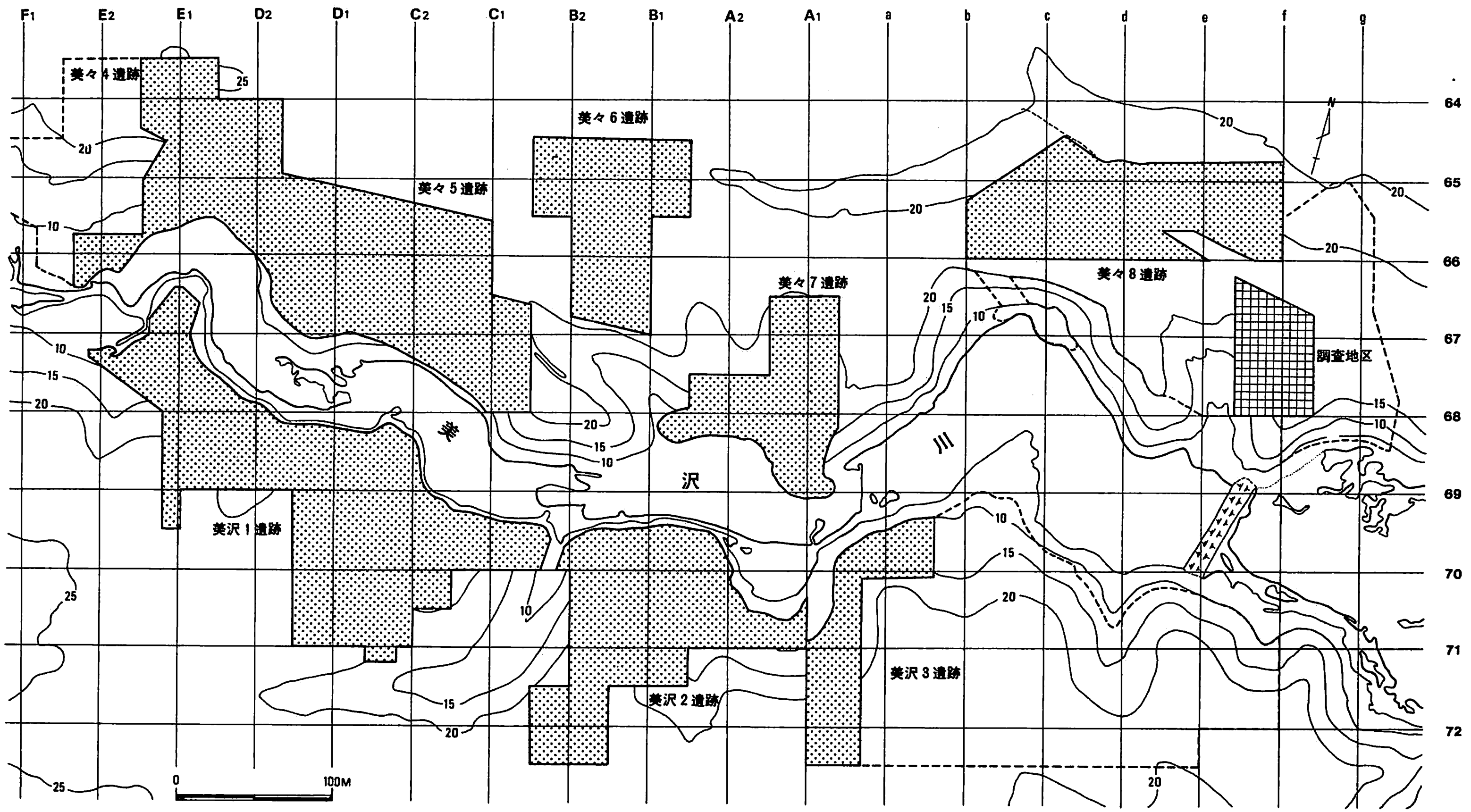


図1　遺跡の位置(●印)

この地図は，国土地理院発行の５万分の１地形図「千歳」を複製したものである。



美々4遺跡
美々5遺跡
美々6遺跡
美々7遺跡
美々8遺跡
調査地区
美沢1遺跡
美沢2遺跡
美沢3遺跡
美
沢
川
0
100M

図2　遺跡周辺の地形

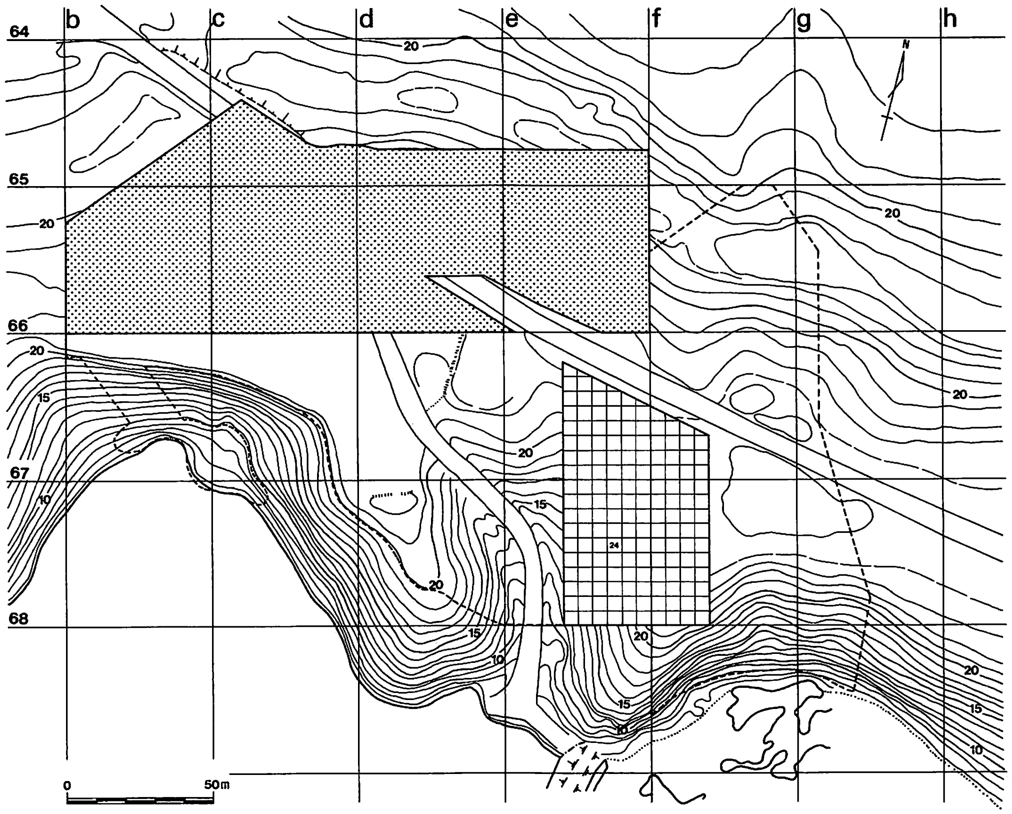


図3　調査地区

遺跡の範囲は破線。メッシュ部分が本年度調査地区。ドット部分は昭和56年度調査済。

大メッシュは50m。小メッシュは，前者を10等分して5m。小メッシュの呼称は，北東隅を00，以下順次西に10，20，30………90，南に01，02，03………09とする。南西隅は99。発掘区の名称は北東隅の呼称をとる。図中の24は，f－67－24を示している。

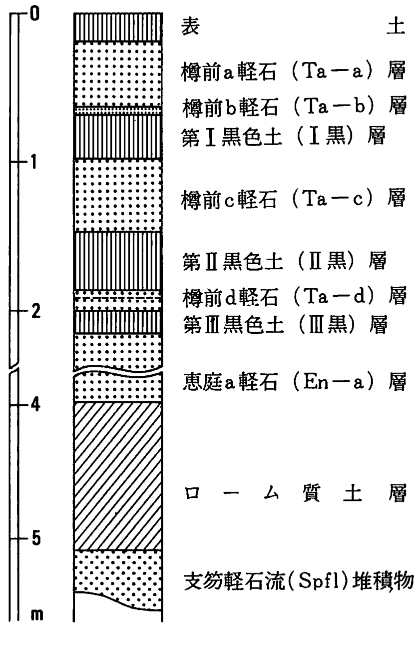


図4　標準土層

土器片には，縄文時代早期，前期，後期，晩期に属するものがあり，小さなスポットをなして分布する。石器は，沢の斜面から底にかけて散漫に分布し，数のうえでは石鏃が多い（図15）。

なお，美沢川流域の遺跡においては，かつて，Ⅲ黒層およびEn－a層下のローム質土層から先土器時代の遺物が検出されていることから，4パーセント相当の面積についてこれらの土層の掘開調査を試みたが，遺物は発見されなかった。

Ⅱ. 第Ⅰ黒色土層（Ⅰ黒層）の遺構と遺物

調査地区南東隅の，台地が舌状に突出した部分約490平方メートルについては，調査着手時点ですでにⅠ黒層が削平されていたので，調査対象から除外した。

1. 遺　構

f－66－33区からf－66－35区にかけて，Ⅰ黒層上面で浅い溝状の遺構が，ほぼ東西に約12mにわたって続いているのが確認された（図5）。両端は，今年度の調査地区を越えて，未調査地区に延びている。幅数十cm，深さ数cmで，断面形は浅皿形を呈し，西暦1667年に降下したとされる樽前山のTa－b軽石層が，くぼみを填めていた（写真Ⅱ－1）。

層位，形状，規模からみて，昨昭和56年度に調査した，この遺跡の別地点（b－65区）で南北方向に約20mにわたって追跡された遺構と同様のもので，道の跡と考えられる。ただし，両者は約200m距っており，同一の道であったかどうかは今のところ明らかでない。

幕末の記録によると，太平洋側と日本海側を結ぶ「ユウフツ越」の主要な中継所である「ビビ」は，本遺跡の付近にあったとされている。今回検出された道跡はTa－b層との関係から17世紀以前のものであり，直ちに古記録と結びつけることは冒険であるが，このルートの原型で

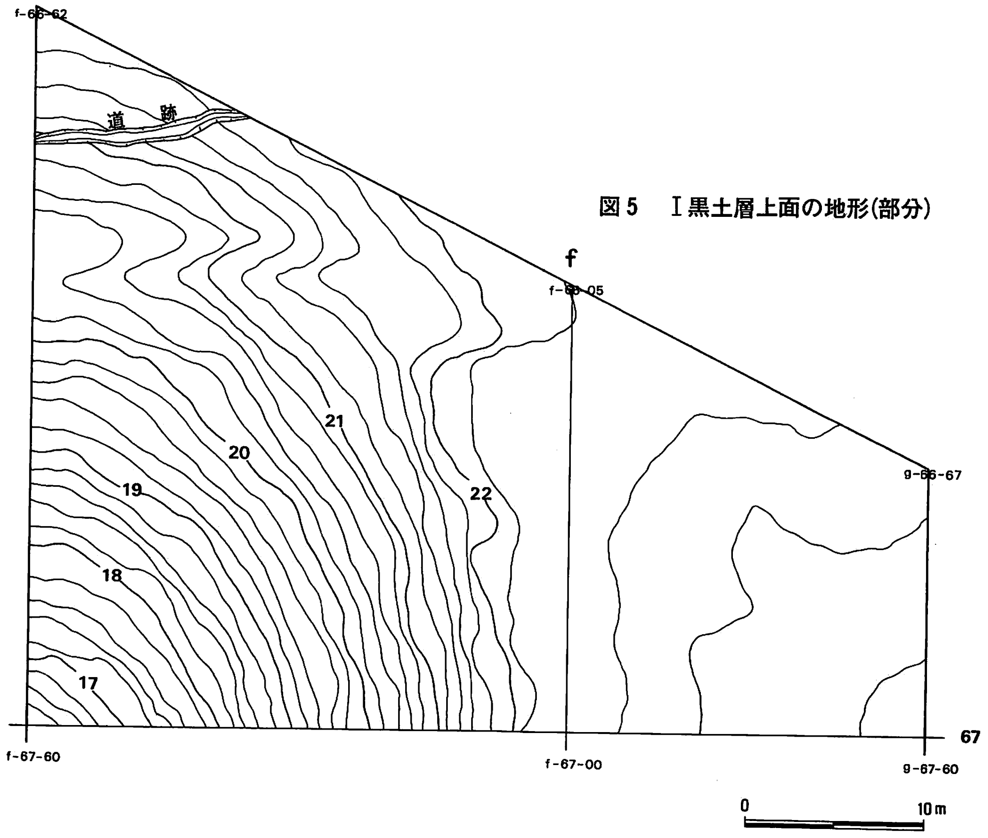


図5　Ⅰ黒土層上面の地形(部分)

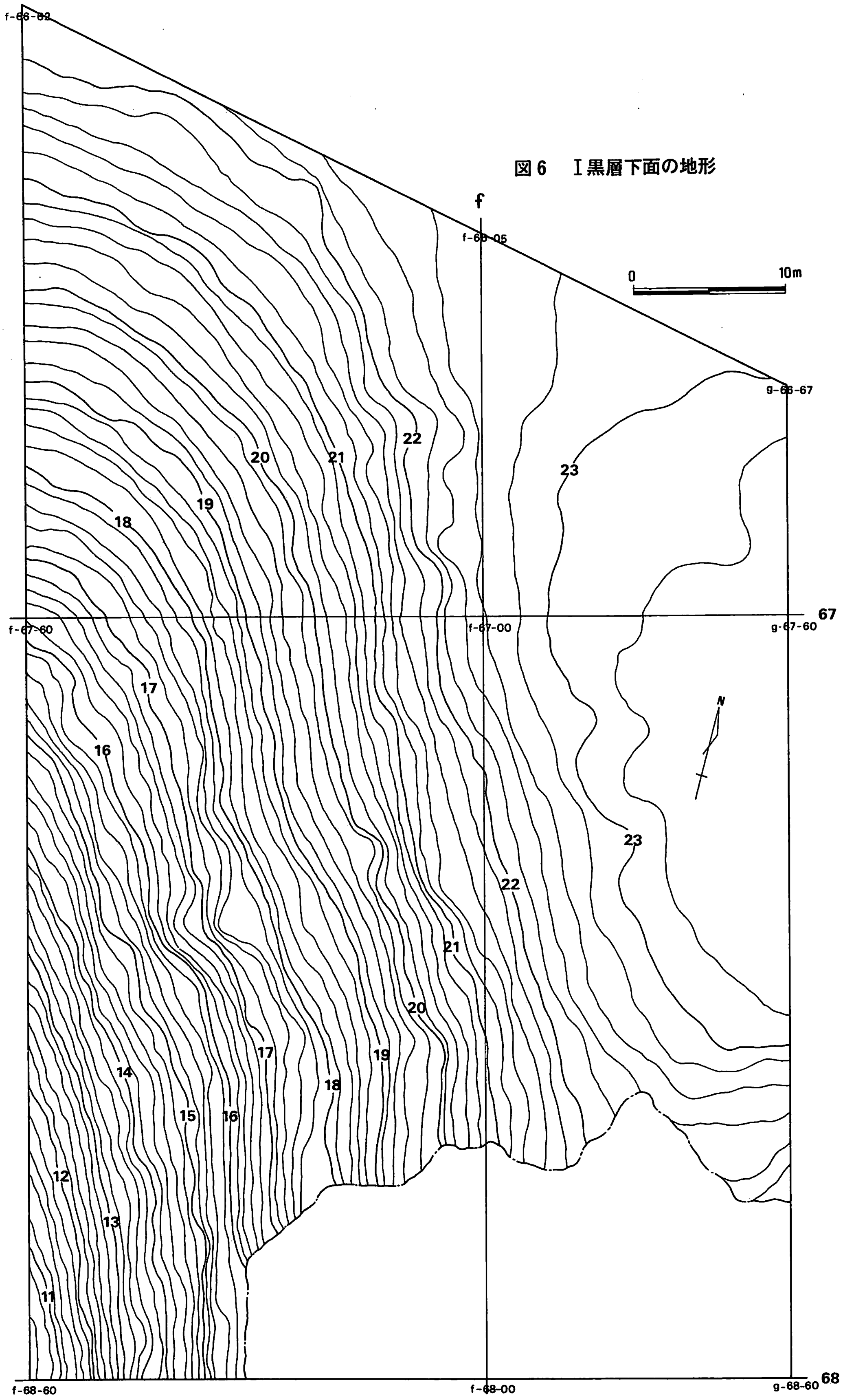

f-66-82
f
f-66-05
0
10m
g-66-67
f-67-60
f-67-00
g-67-60
67
N
f-68-60
f-68-00
g-68-60
68
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

図6　Ⅰ黒層下面の地形

あった可能性が強い。なお，詳しくは，当センター刊「美沢川流域の遺跡群Ⅴ」（昭和56年度）を参照されたい。

2．遺　物

Ⅰ黒層はTa－bと，Ta－c（ca.2,000y.B.P.）のふたつの軽石層に挟まれた土層である。この層からは，縄文時代晩期最終末または続縄文時代初頭の土器片，若干の石器類，および擦文時代の遺物が出土した。前者は少量である。縄文土器の分布は，f－66－15と－25の隣接した2区に限られ，破片数166点にのぼるが細片であり復元に耐えない（写真Ⅳ－1～4)。石器の主要なものは図示した（図9)。4の砥石は縄文時代のものかどうか不明。

擦文時代の遺物は，総数約4,000点で，今年度の調査の主体をなす資料である。これらには，桜井第Ⅰ型式土師器に相当する壺（図8－7)，甕（図7－3)，坏（図8－9～11)，北大式の伝統といわれる円形刺突文列をもった甕（図7－1)，ロクロ成形の小型甕（6)，口頚部に横走沈線の施された初期の擦文土器といわれるもの（5)，須恵器（図8－8・13）などがある。ロクロ成形の土師器坏は発見されていない。また，いわゆる刻文の施された土器片はわずか24点で，全土器片に占める割合は1パーセントにも満たない。

これらの遺物の分布は，発掘区北西隅のf－66－33～34，－42～45，－52～55の10区に約80パーセントが集中し，図示した土器は図7－1を除いてすべてこのなかに含まれる。以下同円状に分布密度を減じ，f－67－44以南では皆無となる。さきにあげた各タイプの土器は，分布のうえからは区分できない。

昭和56年度の調査では，刻文土器を含む土器群と，含まない土器群が分布を異にして検出されている。今回の分布域は後者の地域に近く，接近するにつれて密度を増す傾向にあり，このとから，f－66，e－65，－66区のあたりにこの遺跡の主体部のひとつがあったものと思われる。

以下に，図示した土器および石器の観察結果を掲げる。

(1)　土器（7～8図）

1：甕。発掘区g－67－80。口径14.1，底径8.4，高さ17.3cm。器面の調整は口縁部・体部ではヘラミガキ，底部付近では縦位のヘラケズリ。ミガキの方向は，外面は口縁部・体部とも縦，内面は口頚部横，体部縦である。口唇下に中空の丸棒による刺突文列をもつ。

2：深鉢。体部下半および底を欠く。発掘区f－66－55。口径14cm。口縁部が大きく外反する。器面調整のハケ目の方向は，外面では縦，内面では横である。口唇に，2～3個単位の刻みを配す。

3：甕。口唇のほとんどおよび底部を欠く。発掘区f－66－55。推定口径18.2cm。肩部に明瞭な段をもつ。内外面ともハケ目調整。

4：甕または深鉢の底部。発掘区f－66－45。底径8.1cm。ヘラミガキ調整。

5：甕。発掘区f－66－45。口径20.4，底径5.7，高さ21.6cm。頚部が強く縮約し，口縁部は大きく外反。口唇の断面形は略方形。口縁部から体部上半にかけて沈線ふうの段々をも

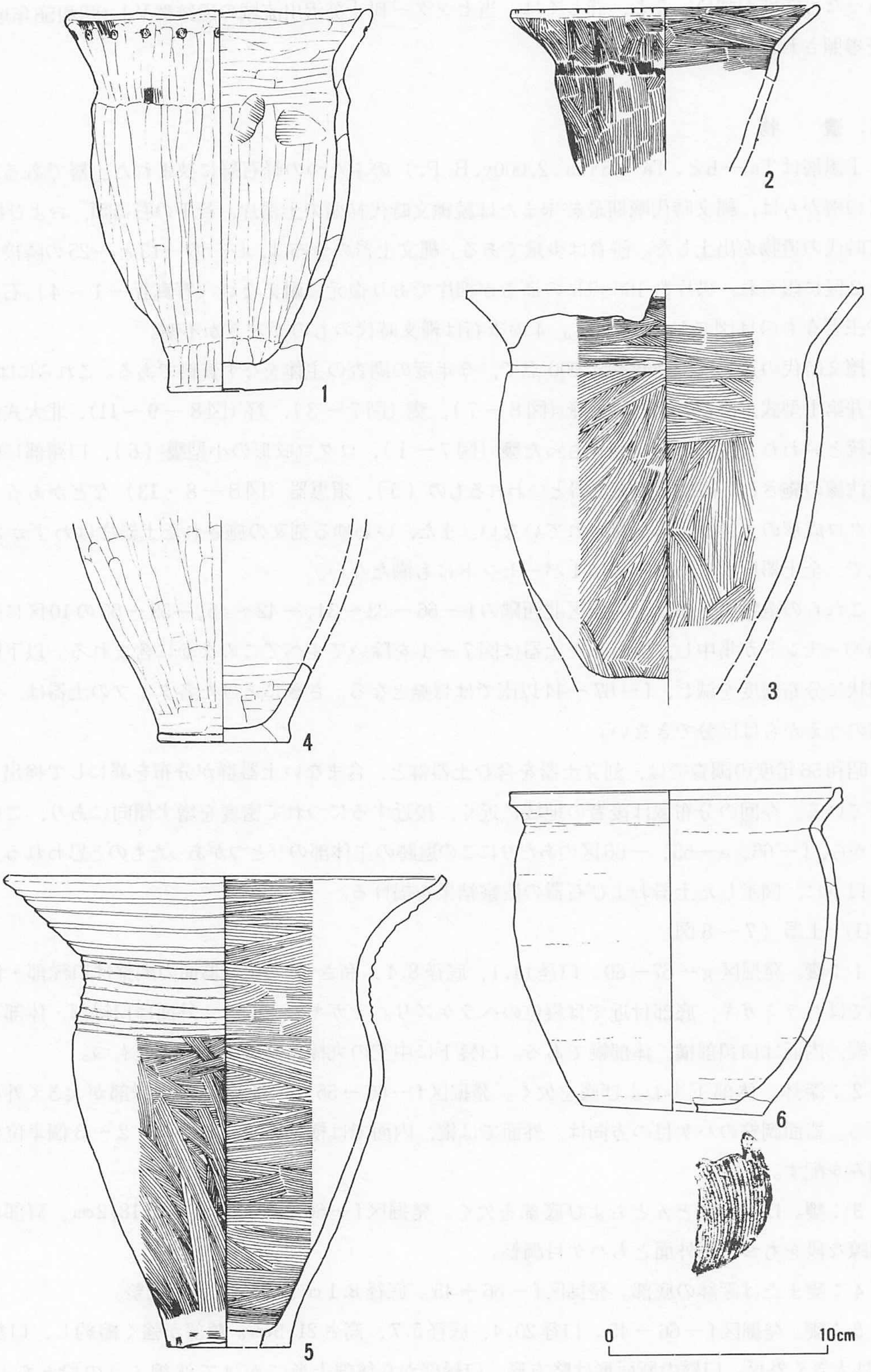


図7　Ⅰ黒層の土器(1)

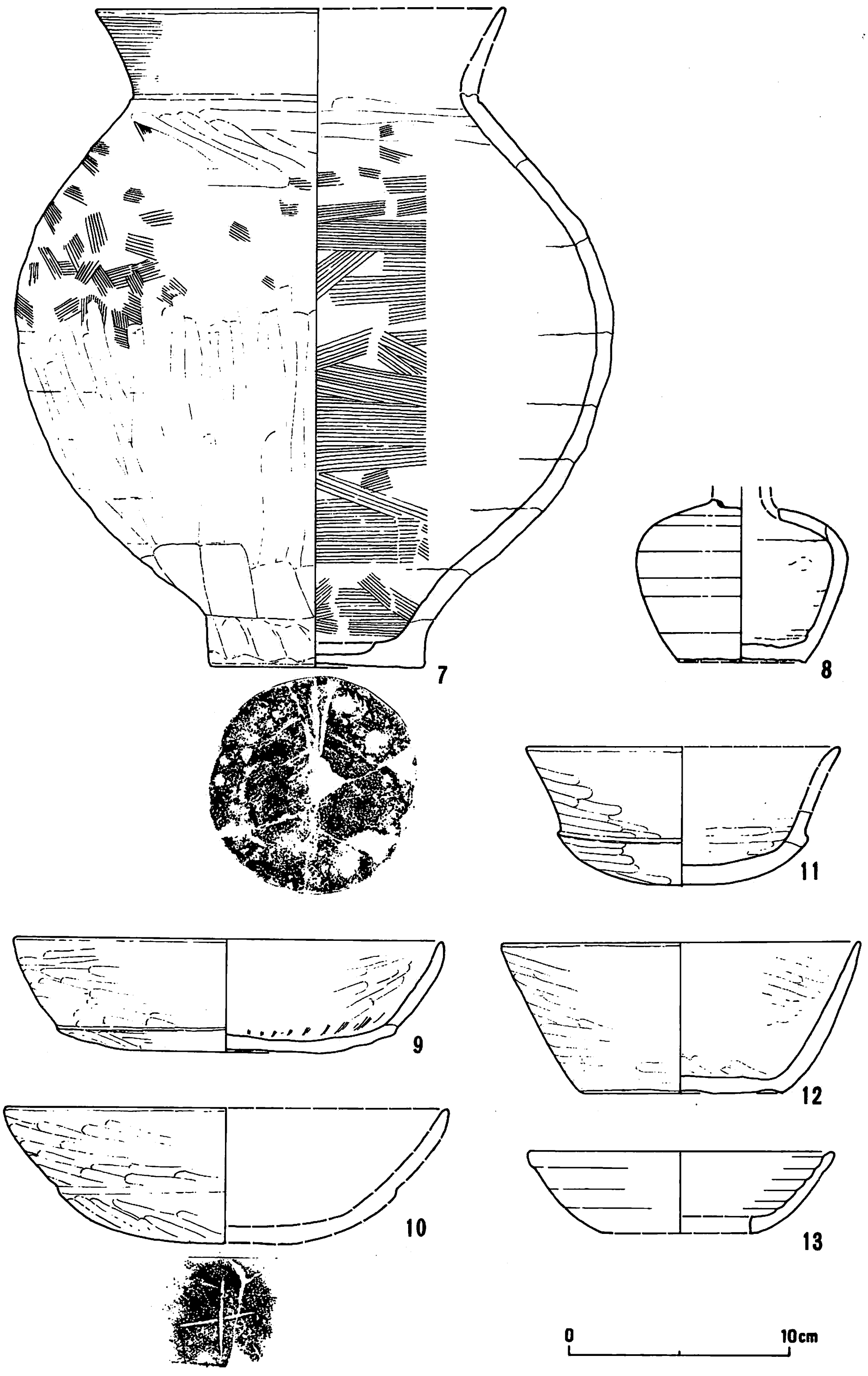


図8　Ⅰ黒層の土器(2)

つ。体部下半の調整はハケ目で方向不規則。内面も横位のハケ目（写真Ⅲ－2）。

6：甕。発掘区f－66－53。口径15.3，底径8.3，高さ14.7±cm。粘土紐つみあげ後ロクロ成形。底部は軸線に対して傾斜している。頚部で「く」の字形に縮約し，口縁部は強く外反。口唇部は直立。底面にはイトキリ痕がある（写真Ⅲ－3）。

7：広口の壺。発掘区f－66－33，－34，－52，－53。口径18.6，体部最大径27.0，底径9.8，高さ29.6cm。円盤形の底部，球形の体部，短く，やや外反する口頚部をもつ。体部と頚部の境い目にはかるい段がある。器面調整は以下のとおり。口頚部は内外とも横位のナデ。体部外面はハケ目調整ヘラミガキで，ミガキの方向は肩部では横または斜め，体下半で縦。底部近くでは縦位のヘラケズリ。体部内面は横位のハケ目。底面には木葉痕がある（写真Ⅲ－1）。

8：須恵器壺。口縁部と底面を欠く。発掘区f－66－35。推定頚部最小径2.7，体部径8.6，底径5.7cm。最大径の位置は，やや寸づまりの体部上半にあって，肩が張り，極端に細い頚部つながっている。

9：坏。発掘区f－66－34，－43，－53。口径19.6，高さ5.2cm。体部下半に段をもつ。丸底だが中央がやや凹み，かるい揚底となる。整形は内外ともヘラミガキ。内黒（写真Ⅲ－4）。

10：坏。発掘区f－66－24，－33。口径20.2，高さ6.1cm。体部下半に段をもつ。丸底。内外面ともヘラミガキ。内黒。底面中央に，焼成前にヘラ先で刻んだ「×」印がある。

11：坏。発掘区f－66－53。口径14.3，高さ6.3cm。頚部が立ち，明瞭な段をもつ。丸底。内外面ともヘラミガキ整形。内黒。

12：坏。発掘区f－66－33。口径16.3，底径9.2，高さ6.9cm。底から口縁まで直線的に開く。平底で，底の稜を強調するように底面整形。内外面ともヘラミガキ。内黒。

13：須恵器坏。底部欠損。発掘区f－66－53。口径13.9，底径（推定）9.2，高さ3.7cm ロクロ水引き成形。

(2) 石　器

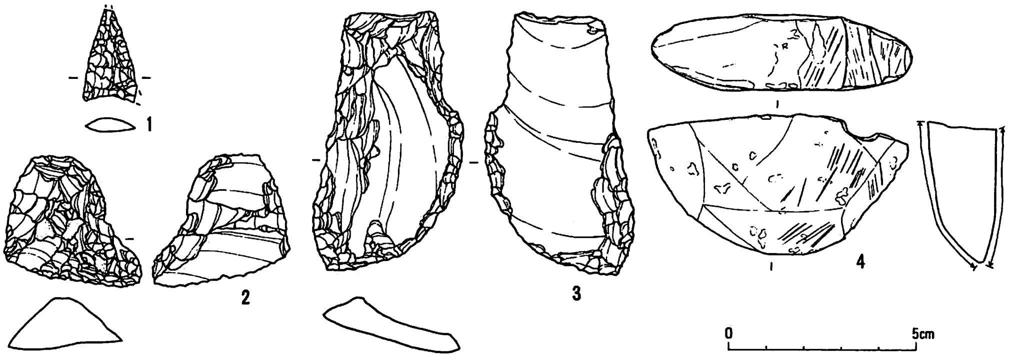


図9　Ⅰ黒層の石器

No.	名　称	発掘区	大きさ（cm）			重さ(g)	材　質	備　考
			最大長	最大幅	最大厚			
1	やじり	g-66-86	(2.4)	(1.4)	0.3	(1.0)	黒曜石	三角形鏃（凹基）
2	スクレイパー	g-67-62	3.6	3.7	1.4	13.5	めのう	
3	ナイフ	〃	7.0	4.1	0.9	29.8	頁岩	
4	砥石	f-66-57	3.7	6.9	2.5	24.7	軽石	半割後再使用。えぐりは，孔のあと？

表2　Ⅰ黒層の石器

Ⅲ. 第Ⅱ黒色土層（Ⅱ黒層）の遺構と遺物

1. 遺　構

検出された7個のTピットの図は，発掘区基線に合わせて，N－7°－Wを上にして，縮尺40分の1で掲載したが，念のため，各ページに1個宛ノース・ディレクションとバー・スケールを示してある。

検出されたTピットはすべて，やや幅広の溝形を呈し，底部における長幅比は6.2～10.2である。底面に杭穴をもつものはない。これらのうちの3個は，小さい谷の底に略5ｍの間隔で配列し（P－5，P－6，P－7），他の4個は，それぞれ2個1対の配置をとっている（P－1，P－2およびP－3，P－4）。ただし，P－3とP－4は調査地区の縁辺にあり，次年度以降調査予定地区に連っていく可能性はある（図10）。

以下に，各Tピットの概要を記述する。規模の単位はｍ。

P－1（図11）

位　置　f－66－49，f－67－40

規　模　確認面（2.50×1.27），底面（2.43×0.33），深さ1.43

形　状　溝形。肩部崩落甚し

土　層　Ⅰ：黒色土（Ⅱ黒＋Ta－d_1≫Ta－d_2）

Ⅱ：赤褐色土（Ta－d_2）

Ⅲ：黒色土

Ⅳ：暗黄褐色土（En－a＞Ta－d_2）

Ⅴ：暗褐色土（Ta－d_2＋黒色土）

Ⅵ：　〃　（Ta－d_2＋黒色土＞En－a）

Ⅶ：黒色土（黒色土≫Ta－d_2）

Ⅷ：黄褐色土（En－a＞Ta－d_2）

Ⅸ：黒色土（黒色土≫Ta－d_2）

遺　物　な　し

P－2（図11，写真Ⅰ－2）

位　置　f－66－49，f－67－40

規　模　確認面（2.10×0.90），底面（1.90×0.19），深さ1.48

形　状　溝形。肩部崩落あり

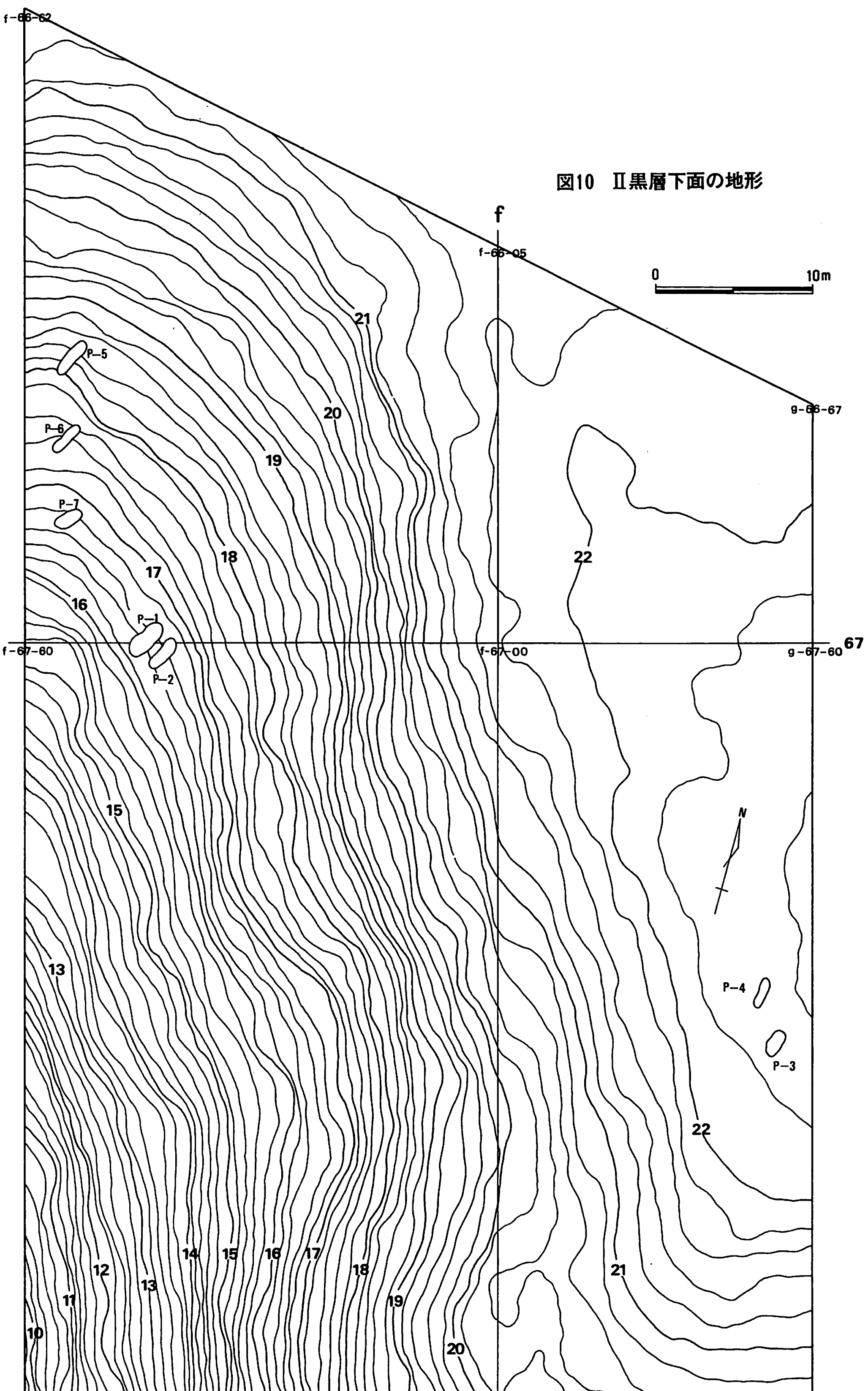
土　層　Ⅰ：黒色土（Ⅱ黒＋Ta－d_1≫Ta－d_2）

Ⅱ：赤褐色土（Ta－d_2）

Ⅲ：黒色土

Ⅳ：暗黄褐色土（En－a＞Ta－d_2）

図10　Ⅱ黒層下面の地形



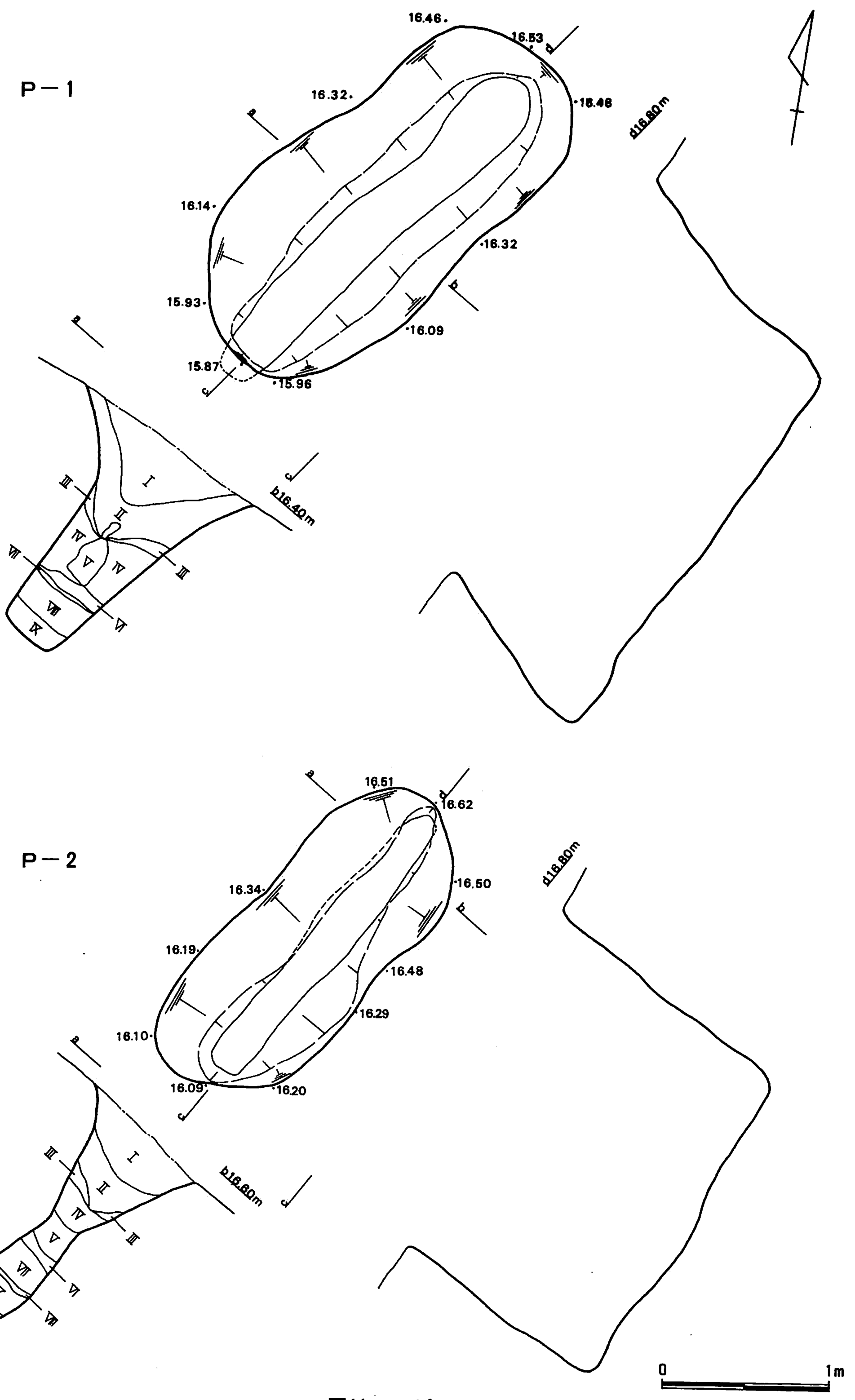
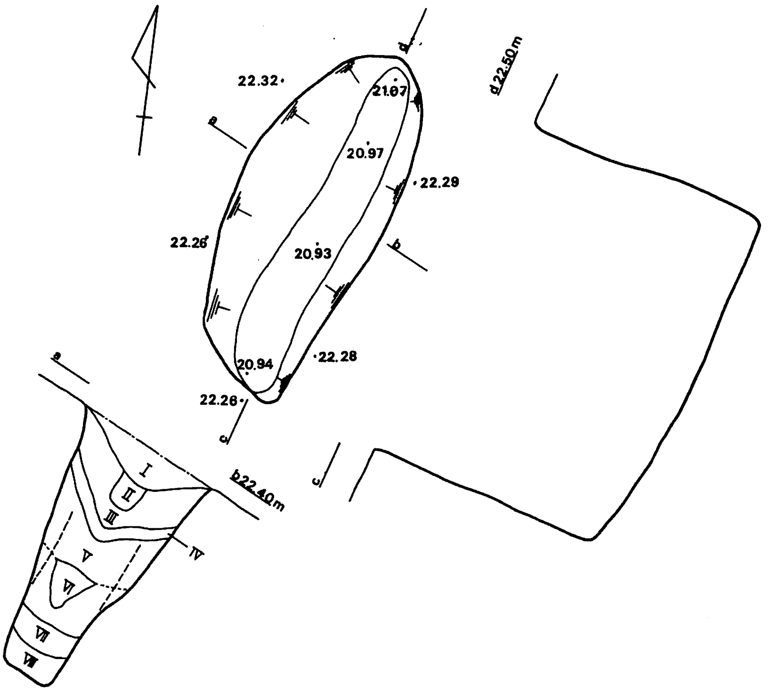

P－1
16.46
16.53
16.32
16.48
d16.80m
16.14
16.32
15.93
16.09
15.87
15.96
b16.40m
P－2
16.51
16.62
16.50
d16.80m
16.34
16.19
16.48
16.29
16.10
16.09
16.20
b16.80m
0
1m

図11　Tピット(1)

P－3



P－4

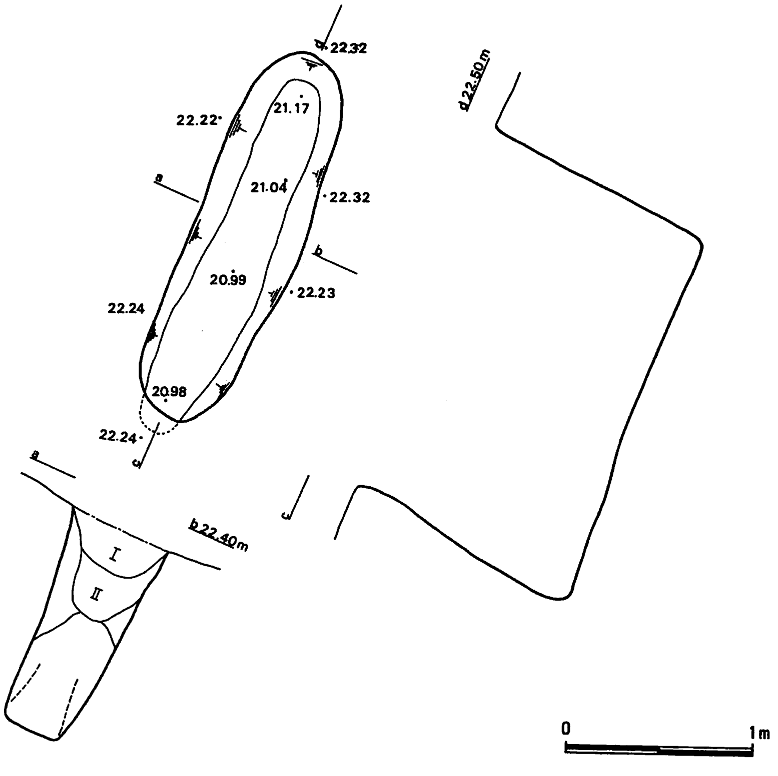


図12 Tピット(2)

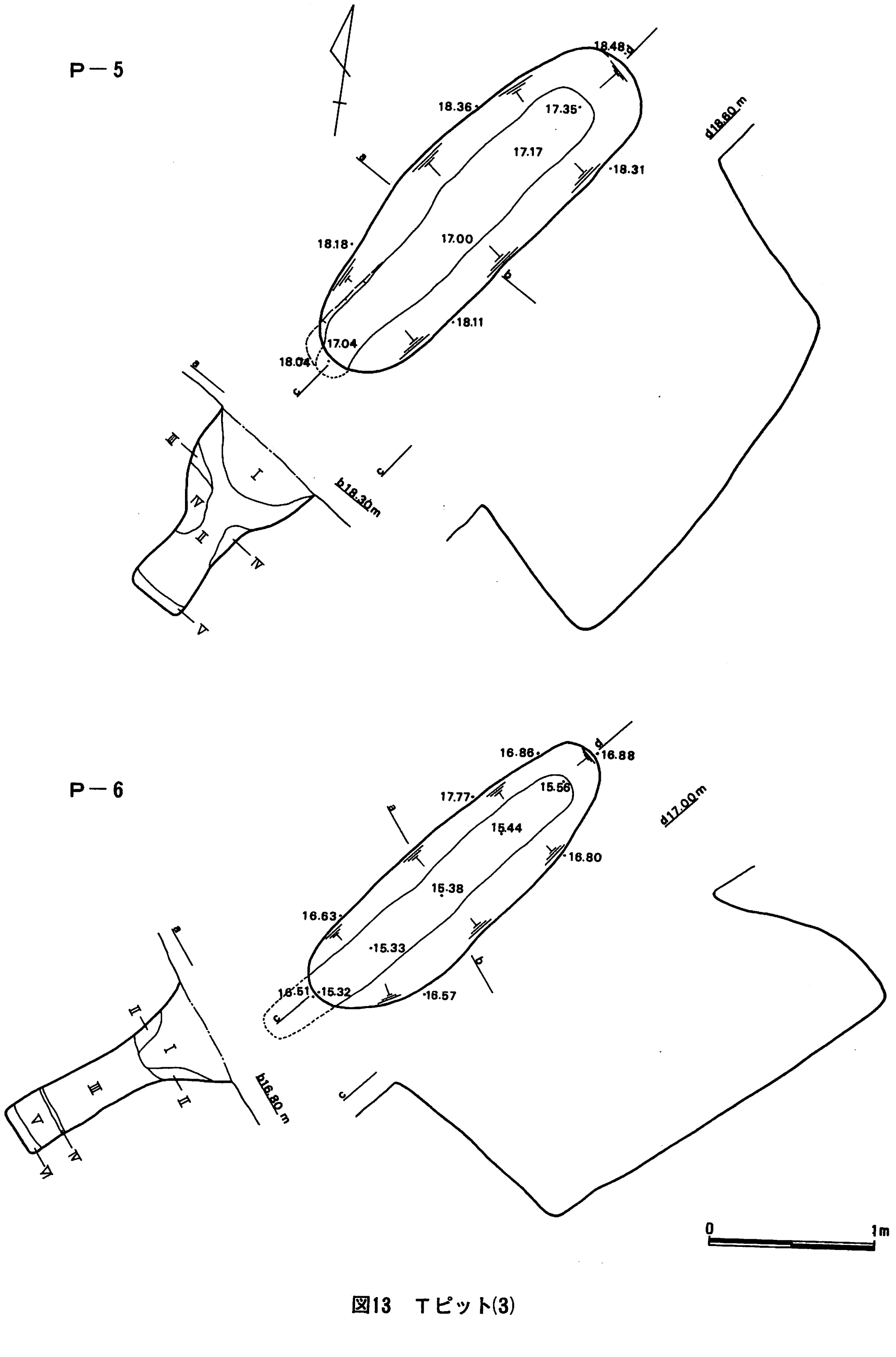

P－5
18.48
18.36
17.35
17.17
18.31
18.18
17.00
18.11
17.04
18.04
d18.60 m
b18.30m
P－6
16.86
16.88
17.77
15.56
15.44
16.80
15.38
16.63
15.33
16.51
15.32
16.57
d17.00m
b16.80 m
0
1m

図13　Tピット(3)

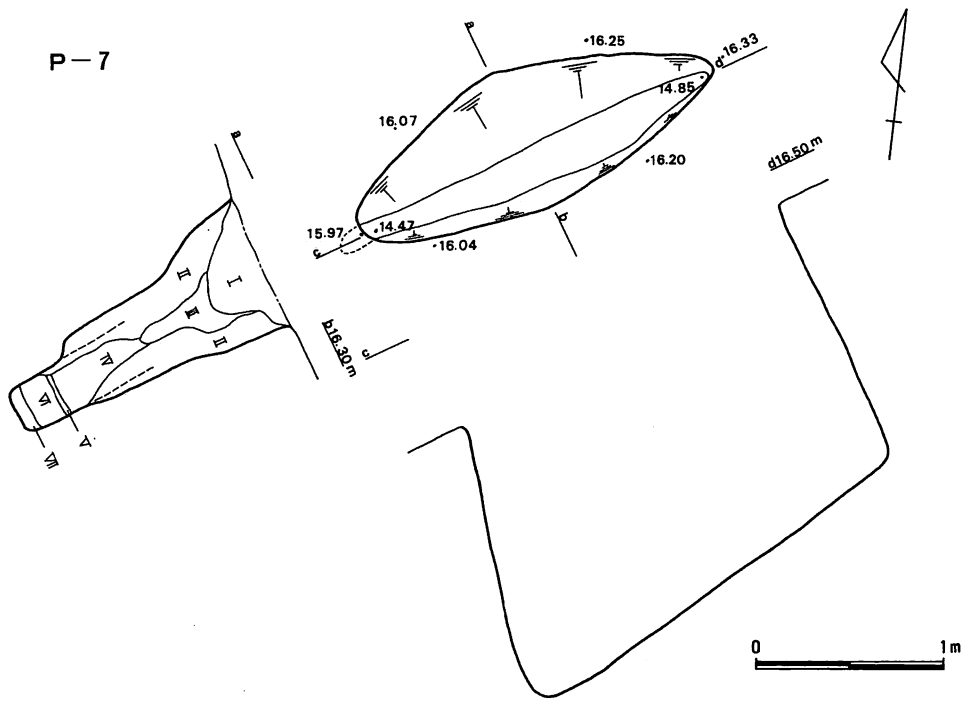


図14　Tピット(4)

Ⅴ：暗褐色土（Ta－d_2＋黒色土）

Ⅵ：黒色土

Ⅶ：黄褐色土（En－a）

Ⅷ：黒色土

Ⅸ：黄褐色土（En－a）

Ⅹ：黒色土

遺　物　な　し

P－3（図12）

位　置　g－67－64，g－67－65

規　模　確認面（1.94×0.81），底面（1.88×0.26），深さ1.37

形　状　溝形。西壁崩落甚し

土　層　Ⅰ：黒色土（Ⅱ黒≫Ta－d_2）

Ⅱ：暗赤褐色土（Ta－d_1＋Ⅱ黒）

Ⅲ：赤褐色土（Ta－d_2）

Ⅳ：黒色土

Ⅴ：黄褐色土（En－aローム）

Ⅵ：黒褐色土（黒色土≫En－a）

Ⅶ：褐色土（黒色土＋Ta－d_2＋En－a）

Ⅷ：黒褐色土（黒色土≫En－a）

遺　物　な　し

P－4（図12）

位　置　g－67－64

規　模　確認面（2.07×0.58），底面（1.92×0.30），深さ1.18

形　状　溝形

土　層　Ⅰ：黒色土（Ⅱ黒≫Ta－d_2）

Ⅱ：赤褐色土（TTa－d_2＞Ⅱ黒）

以下，降雨により崩落，実測図なし

遺　物　覆土上部から，縄文後期初葉と思われる土器片５点出土（写真Ⅳ－10～12）

P－5（図13）

位　置　f－66－56

規　模　確認面（2.50×0.81），底面（2.31×0.37），深さ1.15

形　状　溝形。肩部崩落甚し

土　層　Ⅰ：黒色土（Ⅱ黒≫Ta－d_2）

Ⅱ：褐色土（Ta－d_2＋En－a＞Ⅱ黒）

Ⅲ：赤褐色土（Ta－d_2）

Ⅳ：黄褐色土（En－a＋Ta－d_2）

Ⅴ：黒色土

遺　物　な　し

P－6（図13）

位　置　f－66－57

規　模　確認面（2.21×0.65），底面（2.35×0.27），深さ1.31

形　状　溝形。肩部崩落あり

土　層　Ⅰ：黒色土（Ⅱ黒≫Ta－d_2）

Ⅱ：黒褐色土（Ⅱ黒＞Ta－d_2）

Ⅲ：赤褐色土（Ta－d_2＞En－a）

Ⅳ：黒色土

Ⅴ：暗褐色土（黒色土＞Ta－d_2）

Ⅵ：黒色土（黒色土≫En－a）

遺　物　な　し

P－7（図14）

位　置　f－66－58

規　模　確認面（2.04×0.76），底面（2.14×0.21），深さ1.50

形 状　溝形。崩落甚し
土 層　Ⅰ：黒色土（Ⅱ黒）
　　　Ⅱ：崩落土（Ta－d_2・En－a）
　　　Ⅲ：赤褐色土（Ta－d_2＋En－a）
　　　Ⅳ：暗褐色土（黒色土＋Ta－d_2）
　　　Ⅴ：黒色土
　　　Ⅵ：赤褐色土（Ta－d_2）
　　　Ⅶ：黒色土
遺 物　な し

〈付記〉　人為的な遺構ではないが，調査地区東半の平坦部のⅡ黒層上面において，昭和56年度に検出されたと同様の「獣の足あと」と思われるものが見いだされた。

2．遺　物

Ⅱ黒層からは，縄文時代の遺物が出土した。土器片，石器，フレイクおよび礫で，いずれも量は多くない。

(1)　土器（写真Ⅳ）

早期末，前期初，後期および晩期初の各期に分類することができる。各群とも復元できたものはない。

早期末葉の資料は，中茶路式（写真Ⅳ－28～33）および東釧路Ⅳ式（14～27）に相当し，破片数はそれぞれ約100点。両式の分布には明らかな隔りが認められる。前者は，調査地区北西端のf－66－52区に，後者は東縁のg－67－62～63区に，それぞれ集中していて未調査地区に広がる可能性がある。

前期初頭の綱文式（13)，後期初頭と思われる土器（10～12)，同中葉の手稲式相当（9）のものは各数点が得られたにすぎない。このうち，後期初と思われるものは，若干の繊維を含み，g－67－64区でＴピットＰ－4の覆土上部から検出されたものである。

晩期初頭の土器片（7・8）は150点ほどにのぼるが，細片で，大部分はf－67－20区から出土した。

(2)　石器（図15）

石鏃，つまみ付ナイフ，スクレイパー，石斧，石皿，石錘等が出土した。このなかで，石鏃は28点出土し，石器の55パーセントを占める。これらの石鏃は形態から，柳葉形鏃，三角形鏃，有茎鏃に分けられる。

f－67－06区にフレイクの集中がみられるほか，石器の分布状況はかなり散漫的であるが，強いていえば，調査地区西半部の斜面にやや多い傾向が認められる。

以下に，図示した石器の一覧表を付す。

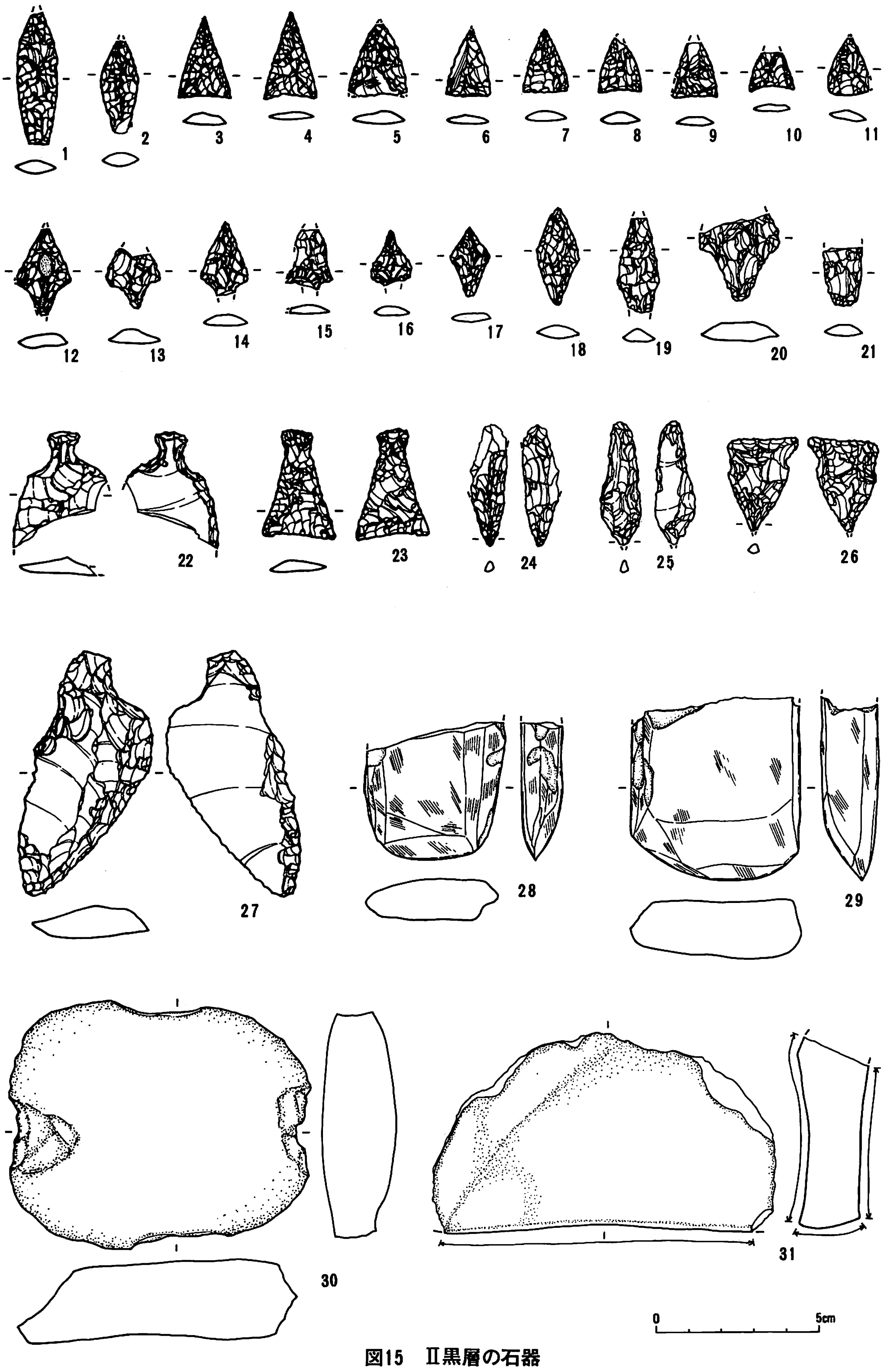
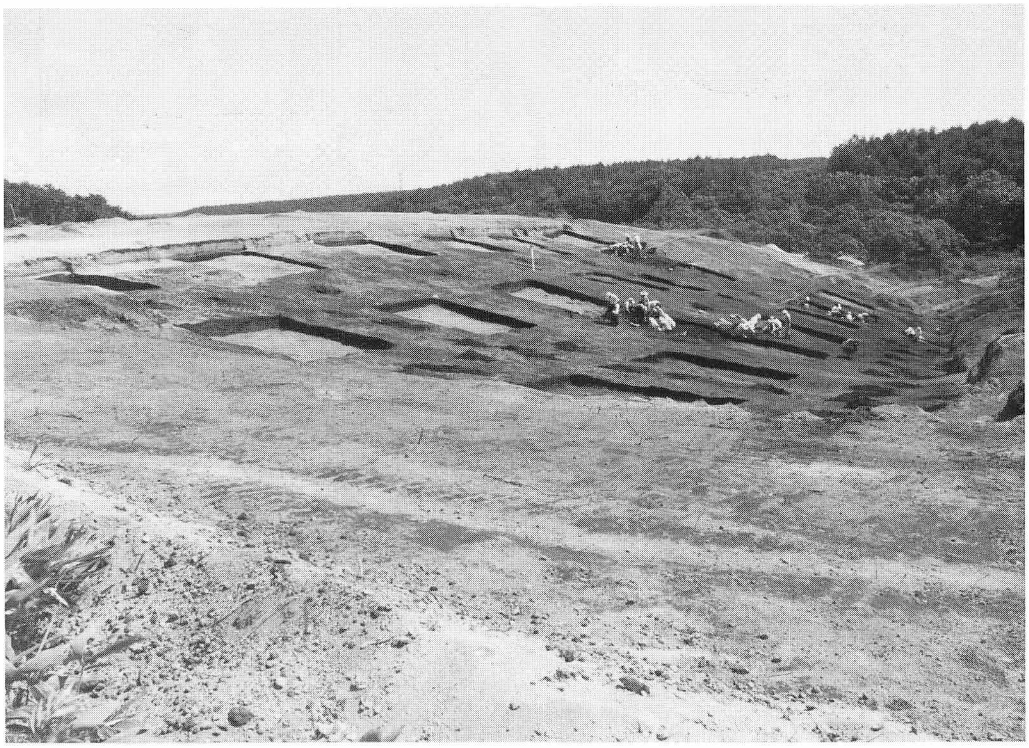

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
5cm

図15　Ⅱ黒層の石器

No.	名　　称	発 掘 区	大きさ（cm）			重さ(g)	材 質	備　　考
			最大長	最大幅	最大厚			
1	石　　鏃	f－66－46	(5.0)	1.2	0.4	(1.8)	黒曜石	柳葉形鏃
2	〃	f－66－28	(2.8)	1.2	0.4	(1.3)	〃	〃
3	〃	f－67－53	2.5	1.6	0.4	1.1	めのう	三角形鏃（平基）
4	〃	f－66－59	2.6	1.6	0.3	0.7	黒曜石	〃　(凹基)
5	〃	f－66－38	(2.2)	(1.8)	0.4	(1.3)	〃	〃　(平基)
6	〃	f－67－42	(2.0)	1.4	0.3	(0.8)	〃	〃　(〃)
7	〃	f－67－06	1.9	1.4	0.3	0.7	〃	〃　(〃)
8	〃	f－67－22	(1.6)	1.3	0.3	(0.6)	〃	〃　(凹基)
9	〃	〃	(1.7)	(1.4)	0.3	(0.6)	〃	〃　(平基)
10	〃	f－67－26	—	1.4	0.2	—	〃	〃　(凹基)
11	〃	f－67－20	1.7	(1.2)	0.3	(0.6)	〃	〃　(円基)
12	〃	f－66－46	(2.7)	1.7	0.5	(1.3)	〃	有茎鏃
13	〃	f－66－52	—	1.6	0.4	—	〃	〃
14	〃	g－67－62	(2.3)	1.5	0.3	(0.9)	〃	〃
15	〃	f－66－49	—	(1.4)	0.3	—	〃	〃
16	〃	f－67－20	(1.6)	1.2	0.3	(0.5)	〃	〃
17	〃	f－66－06	2.2	1.2	0.2	0.5	〃	〃
18	〃	f－66－54	3.0	1.3	0.4	1.1	〃	〃
19	〃	f－67－46	(2.9)	1.3	0.4	(1.4)	〃	〃
20	〃　？	g－66－54	—	2.4	0.5	—	〃	〃
21	〃　？	f－66－19	—	(1.2)	0.4	—	〃	
22	つまみ付ナイフ	g－67－82	—	—	—	—	頁　岩	
23	〃　？	〃	3.4	2.2	0.4	2.0	黒曜石	
24	ド　リ　ル	g－67－64	(3.7)	(1.1)	(0.8)	(3.0)	〃	先端磨滅あり
25	〃	g－67－62	(3.8)	1.2	0.6	(3.7)	頁　岩	側縁磨滅あり
26	〃	f－66－48	(2.9)	2.2	0.8	(3.8)	黒曜石	
27	ナ　イ　フ	〃	(7.5	4.1	1.0	26.2	頁　岩	
28	石　　斧	f－67－02	—	(4.3)	(1.2)	—	泥　岩	
29	〃	f－67－32	—	(5.2)	(1.8)	—	〃	
30	石　　錘	f－67－55	7.8	9.2	2.5	30.5	花こう岩？	
31	砥　　石		6.3	10.6	2.7	1.92	砂　岩	削平部で表採。層位不明

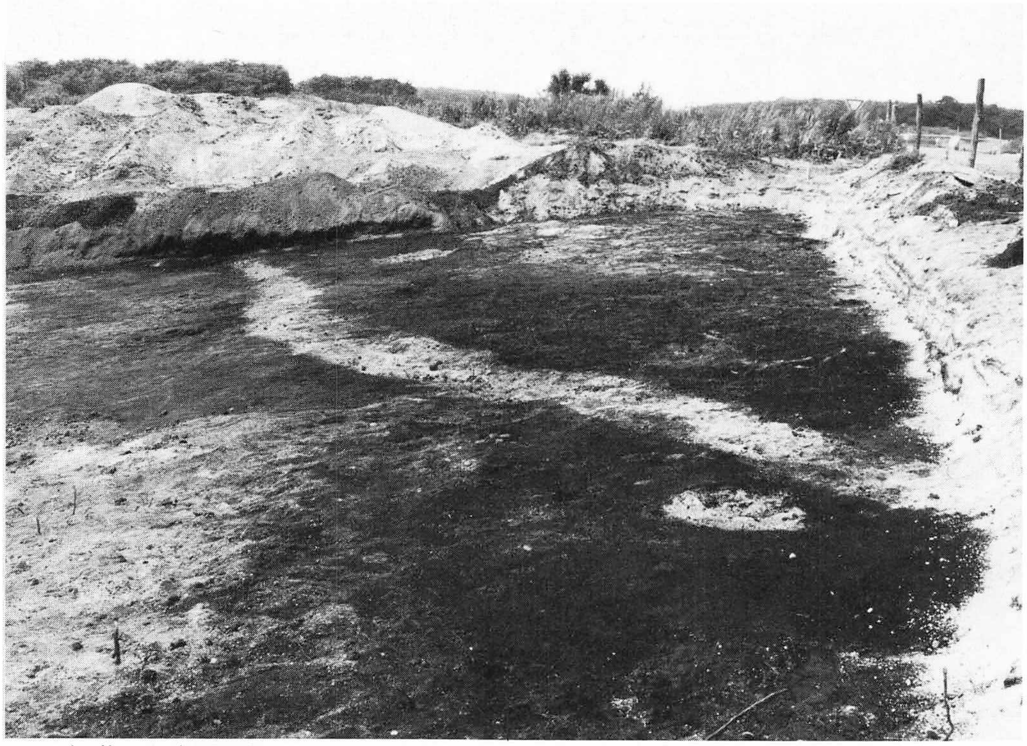
表3　Ⅱ黒層の石器

写　真　図　版

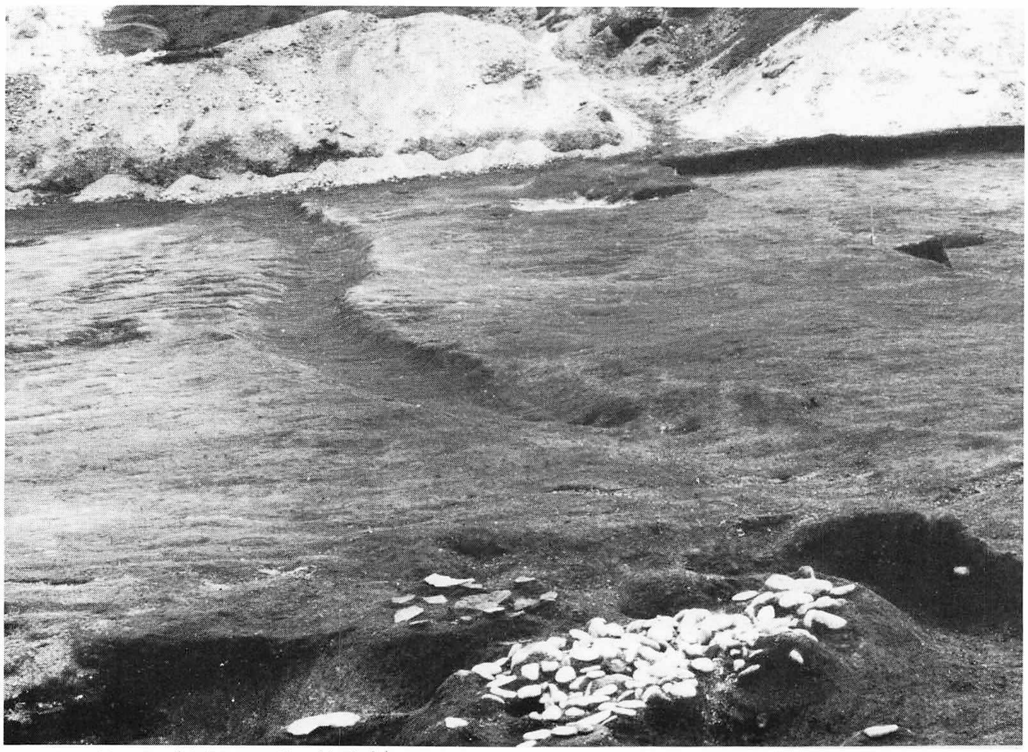


1）調査地区全景（北西から南東を臨む）

2）Tピット・P－2（右はP－1）



1）道　跡（発掘前）

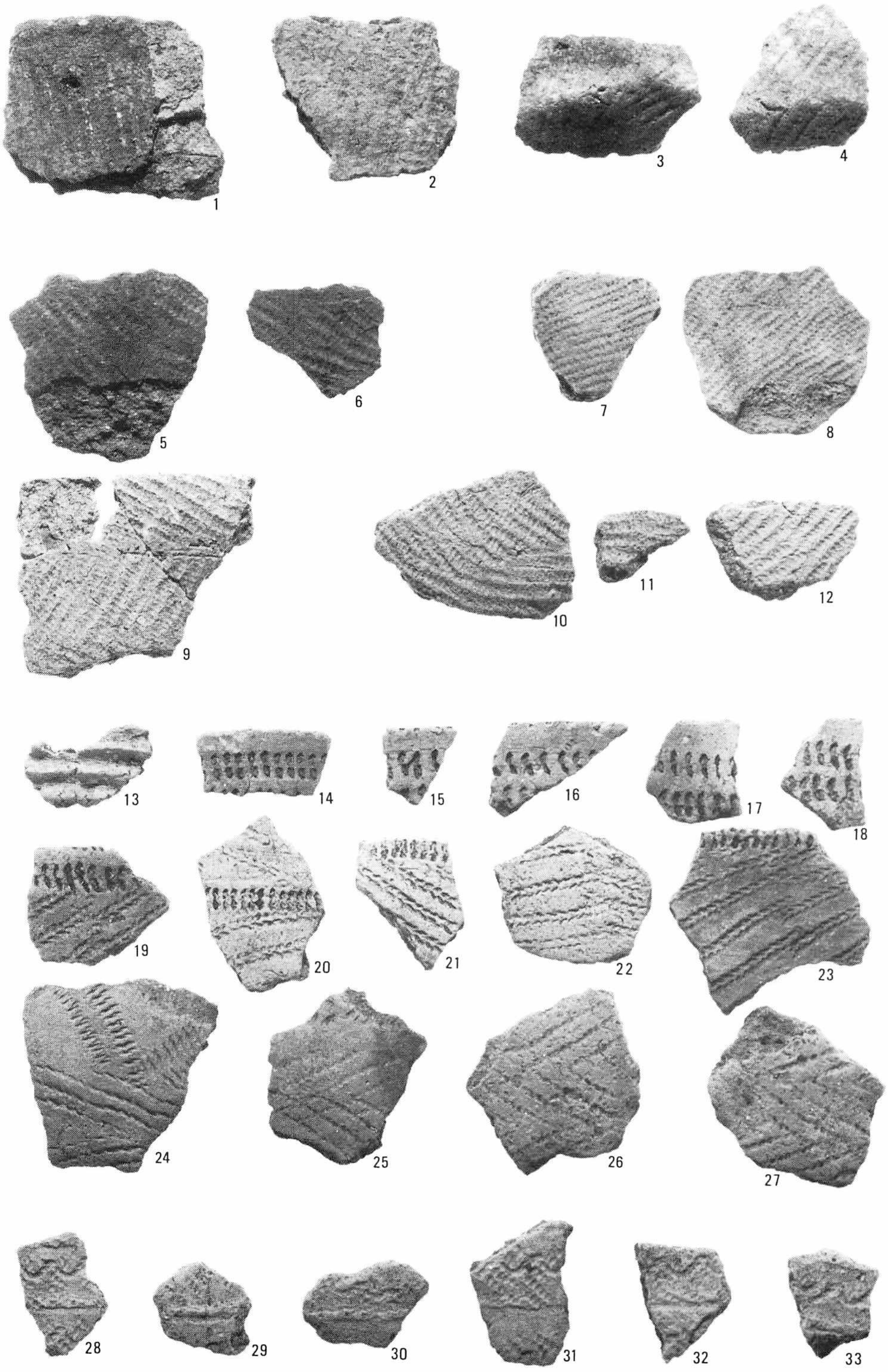


2）道　跡（完掘，手前は攪乱穴）

擦文時代の土器

1	2
3	4

1）広口の壺（図８－１）
2）甕（図７－５）
3）甕（図７－６）
4）坏（図８－９）



縄文土器（1～4はⅠ黒層出土）

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第８集

美沢川流域の遺跡群Ⅵ

―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

昭和57年12月27日　発行

編集・発行　財団法人北海道埋蔵文化財センター
064 札幌市中央区南15条西17丁目
TEL.(011)561―0067

印　　刷　富士プリント株式会社
064 札幌市中央区南16条西９丁目
TEL.(011)531―4711